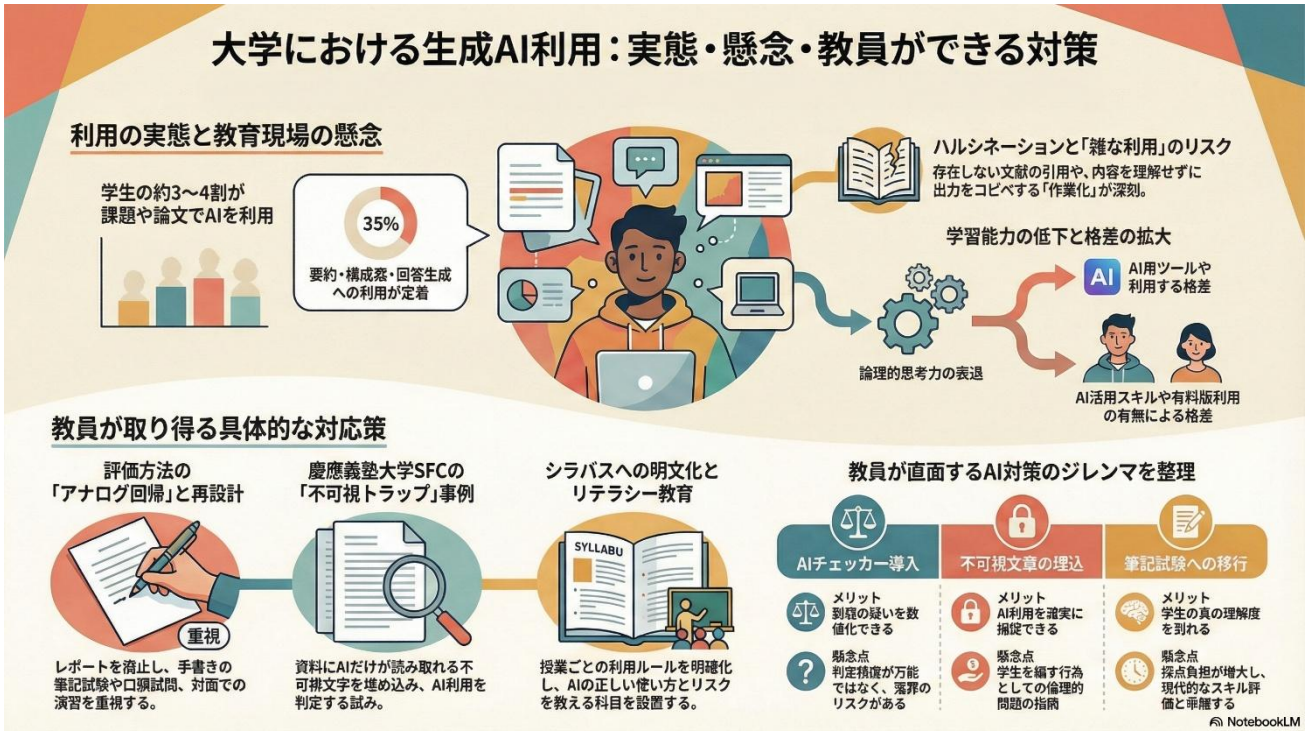
2025 年度 FD 研修会開催報告

日　時：2025 年３月３日（火）10:30～12:00
場　所：大演習室１
参加者：11 名（教員 10 名、職員１名）
テーマ：「学生の AI 利用シーンと、懸念点」

小グループのワークショップ形式での開催とした。まず、グループ毎に自分の授業で学生がどのように生成 AI を使っているかについてそれぞれ実例を紹介し、その後、全体で実感の共有を行った。それらを踏まえ、今後自分の授業でどのように生成 AI 利用を位置づけるかについてグループで意見交換を行った。



セミナー: 大学における生成 AI 利用の実態、ガイドライン整備と評価再設計

---

1. 現状把握と基本方針

明確な統一解は未確立であり、まず学生・教員の生成 AI 利用の実態と多様な用途・問題点を全学で共有し、段階的に課題整理と暫定対策へ移行する。過度な AI 依存は学習効果低下や理解不足を招くため、部分的利用を容認しつつ教育目的に沿った許容範囲の明確化が必要。

2. 学生の AI 利用実態・用途と懸念

授業・研究・レポート作成、翻訳・外国語作文、要約、プログラミング、エクセル関数、就活 ES、メール、雑談など幅広く利用。要約 45%、レポート・添削 38%、テスト・宿題 34%などの外部調査結果がある。過度依存による学修不全（コピペ、文体偽装、説明不能）、ハルシネーションによる架空出典・

誤情報、医療自己診断の危険、画像・動画生成の著作権リスクが確認され、出典一次確認・検証手順の導入とリスク周知が求められる。

3. 教員の AI 活用状況と評価

教員側では、業務課題解決、研究データ収集・整形、教材チェック・音声生成、翻訳・プログラム生成・データ生成、崩し字解読、議事録作成、記事執筆、検索要約活用など多様な実践がある。品質・信頼性評価は分かれ、文単位では正確でも全体整合性に問題が出るため、検証・専門家レビュー・再現確認の指導が重要。

4. 検出・確認とチェッカー運用

AI チェッカーの確率表示のみで断定せず、口頭試問・面談、補助資料提示を組み合わせる確認プロセスが妥当。手書き課題でも AI 利用が疑われる事例（約 1 割）に対し、リアクションペーパー等の再チェック、口頭試問、草稿提出、逐次課題の併用など抑制・検証手法の整備が必要。チェッカーの判定は補助的証拠と位置付け、閾値、再提出、反証機会、異議申立てを含む運用ルールの設計が求められる。

5. ガイドライン・シラバスの具体化

現行ガイドラインは抽象的であり、科目別に許容範囲・申告方法・引用・出典ルール・検証方法・摘発手法・評価方針をシラバスに明記する。論述試験、レポート、演習、プログラミング初級など科目タイプ別の具体化案を教員間で合意形成する。不可視化テキストなどの抑止的課題設計は教育効果と倫理のバランスに留意し、事前説明と評価基準の透明化を図る。

6. 授業デザインと評価再設計

- 筆記・論述試験、小テストの多用、対面確認、プロセス評価、口頭試問、ピアレビュー、フィールドワークなど AI 代替困難な活動を組み合わせたハイブリッド評価へ再設計。
- レポートでは「AI 支援の範囲明記」「自分の言葉で説明可能」を必須要件化し、参考文献の一次確認を提出要件に追加。
- 授業課題に「AI 回答の批判・修正」を組み込むメタ認知タスクを導入し、批判的考察力を育成。
- プログラミング初級では課題難易度・最終レポート設計で差をつける現実的運用をしつつ、物理的遮断など過剰対策は回避。

7. ツール活用と品質管理

NotebookLM、Copilot、Gemini 等の複数ツールを使い分け、要約・スライド作成等の出力に対して教員が品質チェックを担保する。AI 生成スライドは内容が薄くなりがちなため、単一ツール依存を避ける。無料版利用に伴うプライバシー・データ収集リスクを周知し、企業のデータポリシーの確認を促す。

8. 検出・剽窃チェックと個人情報保護

学生提出物の外部サービス投入は、個人情報保護と「AI 学習に利用しない」方針が明示されたサービスに限定。大学として許容サービスをリスト化し、同意取得プロセスを整備する。

9. リテラシー教育とアクセス格差対応

・教員向け AI リテラシー研修を継続実施（基礎→応用→評価設計、科目別ケーススタディ）し、シラバス記載を支援。

・学部共通の必修 AI リテラシー科目を検討し、使い方・倫理・出典・引用・分野別ツール選択・個人情報保護を扱う。用途別の適切な利用指針を学生へ周知。

・学生間の金銭・知識格差に対し、無料で安全に使える機能・リソースの案内、キャンパス共用端末・ライセンスの整備を検討。

10. 倫理的論点と透明性

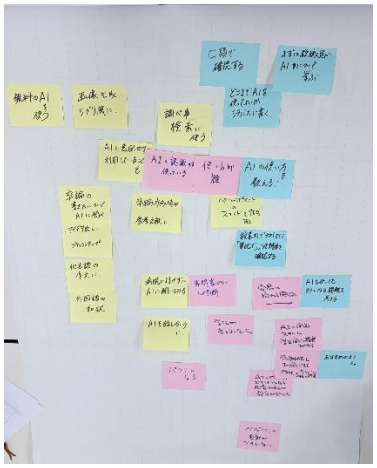
不可視化テキスト等の欺罔的手法は賛否があり、教育効果と倫理のバランスを踏まえたガイドラインを策定する。ゼミ・研究での AI 利用における再現性・著作権・倫理に関する申告、ログ保存、検証フレームの明確化が必要。性善説と性悪説の両面を考慮し、過度利用の危険性を学生・教員双方に継続周知する。

11. 今後の進め方（収集・共有・設計）

・学生の利用シーン・検出事例、他大学の対策・関連サービスの継続的収集・共有を進め、次回以降、実態共有に基づく課題整理と暫定対策案の検討に移行。

・現場の対策事例（筆記試験化、AI 批評課題、AI 耐性ある課題設計）を体系的に集約・比較し、効果・負担・学習効果の評価フレームを整備。

・チェッカー運用基準（面談トリガー、証拠保全、学生周知、異議申立て）を具体化し、全学ガイドラインと連動させる。

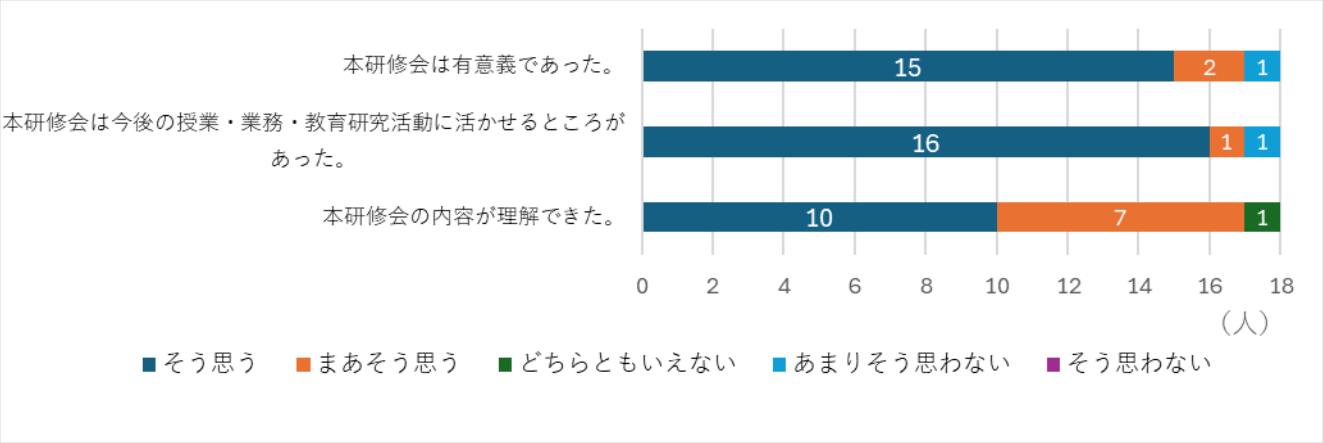


2025 年度 FD･SD 研修会 実施報告書

FD 委員会

1. 日時: 9 月 18 日(木) 9:30～11:30
2. 会場: 出雲キャンパス 中講義室
3. 講師: 三好 雅之 先生
   鳥取大学教育支援･国際交流推進機構 高等教育開発センター准教授
4. テーマ:学生の卒業時のコンピテンシーを見据えてカリキュラム 授業デザインを再検討する
5. 研修会内容:講演･演習(個人＋ペアワーク) 120 分(質疑応答含む)
6. 参加者:27 名(看護学科教員 22 名･健康栄養学科 2 名･学務課職員 3 名)
7. アンケート結果

◊回答数:18 名(教員 18 名･職員 0 名) 回答率 66.7%



◊本研修会に対する意見・感想

- 自分の授業を点検する機会となった。他領域の教員とペアになったため、いつもとは違う視点からコメントやフィードバックを受けることができた点も有意義だったと思う。
- 自分の今後の授業に活かせる学びがたくさんあった。ありがとうございました
- 授業の組み立てにおいて大事な部分を再確認できた。
- 自分の授業を振り返るよい機会になりました。次年度より、授業の工夫をしたいと思う。有意義なお時間をいただきましたことに感謝する。このような機会を作っていただきありがとうございました。
- 分かりやすい内容でよかった。ワークも取り入れられての研修で、学生もこのようにワークがあると集中できると思った。
- 具体的に改善策を考えることができた。
- 本日の講義とペアワークを通して、自分の授業の構成を改めて見直すことができた。
- 本日の講義を受講し、ワークでディスカッションしながら意見をいただき、自分の実際の演習スケジュールを ID に基づいて具体的に修正することが出来た。一方的な講義にならないよう、学生のアウトプットの時間を増やし、20 分以上同じことを話し続けないように、演習で実践したことについてグループ、教員からのフィードバックの時間を設けるなど工夫が必要だと理解できた。
- 自身の講義内容を振り返ることのできる有意義な時間だった。1日かけて研修をしてもよいような内容であった。
- 研修時間が後1時間くらい長くても良いと思えるくらい充実した2時間だった。ありがとうございました。
- 研究と教育のバランスを考えながら、可能な限り今回の研修を教育に役立てたいと思う。
- 目標を明確にすることが、まずはとても重要だということがよくわかった。学生に教えないといけないという思いになりがちだが、授業は学生と一緒に作っていくものだということを再認識した。時間が短く省略されたところもあったのが残念だった。
- ID は取り入れたいと思っていたが、書籍を読むだけではよく分からずに困っていたので、大変たすかった。ワーク中タイマーを全画面表示で投影されていたが、課題とタイマー両方が見えた方がありがたい。
- 100 分の授業構成の話なのにスライドの随所に 90 分授業とあり、あれと思いあまり入ってこなかった。

◊今後の FD 研修会の企画に関する意見・要望

- ID について
- えんたくん（対話）について

8. まとめ

今年度から導入された 100 分授業・クォーター制を踏まえ、実践的な視点から授業改善のヒントを得ることを目的に、FD・SD 研修会を開催した。アンケート結果から、ID 理論は参加者の興味・関心が高いテーマであったことが分かり、大変有意義な研修会になったと考える。参加者の多くは講義で ID 理論の基礎を学び、ペアワークを通して授業の明確な目標設定、評価方法、授業内容案をデザインすることができたことから、授業の質的向上が期待される。

運営側の課題として、アンケート回収率がやや低かったため、研修終了時に QR コードを画面に映し、参加者がその場で回答できるように工夫が必要であった。

島根県立大学・島根県立大学短期大学部

松江キャンパス

令和 7（2025）年度FD報告書

1. FD 学内研修会の実施報告　p.2-3

2. 授業評価アンケートの実施結果
　2－（1）人間文化学部　p.4-7
　2－（2）短期大学部　p.8-12

3. 松江キャンパス独自の取り組み　p.13

4. 松江キャンパス FD 委員会の今後の課題　p. 13-14

5. FD 委員会年間スケジュール　p.15

令和 8 年 3 月 31 日
松江キャンパス FD 委員会

1. FD 学内研修会の実施報告

(1)今年度の FD 研修会の実施状況(計6回)

FD 研修会は、令和 6 年 4 月から、原則的に月1回開催される松江キャンパス会議終了後の 1 時間以内の時間で開催している。FD 委員会主催の研修会と他の委員会共催の研修会を、教員・職員向けの FD・SD 研修会として実施した。今年度実施・計画中の研修会は以下のとおりである。

回	日時	研修テーマ・講師	講師	参加人数
第1回	4 月 16 日(水)	【FD・SD 研修会】対面研修(大講義室) 「ハラスメント研修」	島根県立大学 松江キャンパス 副学長　岩田英作	教員 44 名 職員 20 名
第2回	4 月 16 日(水)	【FD・SD 研修会】対面研修(大講義室) 「発達障がいについて」	障がい学生支援委員会 委員長　藤原映久	教員 44 名 職員 20 名
第3回	7 月 9 日(水)	【FD・SD 研修会】対面研修(大講義室) 「連絡の取れない学生への対応」	保健管理委員会　執行 三佳カウンセラー	教員 43 名 職員 19 名
第4回	8 月 6 日(水)	【FD・SD 研修会】対面研修(大講義室) 「春学期授業公開(見学)の振り返り」	FD 委員会 委員長　小山優子	教員 40 名
第5回	10 月 8 日(水)	【FD・SD 研修会】対面研修(大講義室) 「科研費について」	FD 委員会 渡部准教授・ラング准教授 石橋照子アドバイザー	教員 36 名
第6回	2 月 12 日(木) ～ 2 月 28 日(土)	教職専任教員向け FD 研修(オンデマンド) 「教職 FD 研修」	教職委員会 委員長　時津啓	教員　7　名 (アンケート回答数)

研修会に出席できなかった教職員向けには、研修講師が許可した場合のみ、FD 委員会の共有フォルダに研修データや資料を掲載し、閲覧できるようにしている。

(2)FD 委員会主催の FD 研修会(計 2 回)

昨年度より実施を再開した授業公開(見学)は、今年度は春学期に実施した。その後、8 月の FD 研修会にて教員による振り返りの FD 研修会を実施した。

FD 委員会主催の研修会は、10 月に科学研究費の申請と獲得に向けた研修会を企画し、実施した。

①「授業公開(見学)」実施後の振り返り研修会(第 4 回 FD 研修会)

日　時:令和 7 年 8 月 6 日(水)

演　題:春学期授業公開の振り返り研修会

方　法:対面

概　要:

春学期に実施した授業見学の振り返りとして、学科ごとに 6～8 名程度のグループに分かれ、授業見学の報告と意見交換を行った。

参加者：40 名
評価と課題：
　授業見学を通しての感想や、他の教員の授業の進め方や学生への対応などの情報共有を行った。また、昨今のノートパソコンやタブレット、スマートフォンなどの ICT 機器を活用した授業改善の工夫や配慮の必要な学生への対応について、教員と学生間で授業を受講するルールをどのようにしているか、授業での ICT 機器の使い方など、現状や考え方を話し合った。

② 科学研究費について考える（第5回 FD 研修会）
日　時：令和 7 年 10 月 8 日（水）（キャンパス会議終了後）14:10～15:10
演　題：科学研究費について考える
方　法：対面
講　師：石橋照子学長補佐（本学 URA）、内山仁志准教授、水内豊和准教授、古賀洋一准教授、藤翔平講師
概　要：
　松江キャンパスでは、研究活動の活性化が課題となっており、なかでも科学研究費の採択状況の改善が課題となっている。まずは、応募者数の増加を図ることが、改善に向けた第一歩の取り組みとして求められる。教員間で科学研究費の応募に対する機運を高める目的で、科学研究費に関する研修会を実施した。本学 URA の石橋照子学長補佐による講演、松江キャンパス科研アドバイザーの内山仁志准教授による応募に対するサポート体制についての説明がなされた。その後、松江キャンパスの科学研究費採択者である水内豊和准教授（保育教育学科）、古賀洋一准教授（地域文化学科）、藤翔平講師（保育学科）より、申請経験に基づくアドバイスや課題、応募までの工夫等について共有がなされた。研修会全体は 60 分以内で実施した。
参加者：36 名（教員）

評価と課題：
　本研修会に関するアンケート結果では、「とてもそう思う」13 名、「そう思う」6 名、「どちらともいえない」1 名という回答が得られ、否定的な回答は見られず、全体として概ね好評であった。
　登壇者の具体的な経験談や工夫が刺激となり、科研費応募への意欲が高まったという趣旨の感想が複数寄せられた。一方、日程上やむを得ない面であるものの、研修会の実施時期に関する課題も指摘された。しかし、この意見は、得られた知識を、実際に活用し応募しようという意欲に基づくものであり、本研修が研究活動の活性化につながったことを示すものである。以上の点から、科学研究費応募に向けた機運の醸成という目標に対して、一定の成果が得られたと考える。

2-(1) 授業評価アンケートの実施報告(人間文化学部)

(1)目　的:「学生自身の授業に取り組む姿勢」と「教員が行った授業」についてのアンケートを実施し、その結果を授業の工夫や改善に活用する。

(2)方　法:学生情報システム「Unipa-web」のアンケート機能を使用した。

(3)実施期間:(春学期)令和 7 年7月10 日(木)～8月 3 日(日)
(秋学期)令和 8 年1月23日(金)～2月16 日(月)

(4)回収率

今年度も、授業評価実施率は両学期を通じて 100%であった。一方、回収率については春学期が52.3%、秋学期は 39.2%と大幅に減少した。過去3年間の回収率は、令和5年度春学期が 66.5%、令和5年度秋学期 53.4%、令和6年度春学期 48.8%、令和6年度秋学期 46.4%と年々、回収率が下がっている。

令和7年度秋学期の授業評価アンケートの実施にあたり、FD 委員会より授業の最終回に学生が授業評価アンケートを回答する時間の設定を改めて依頼したが、それが徹底できていなかったことも要因の一つと考えられる。また、1単位8回の授業については、アンケート実施時期に対面の授業が終了しているため、直接アンケートを回答することが困難であることは以前からの問題点であった。今回の回収率の低迷を受け、8回授業の前に授業評価アンケートを回答できるように教務システム上の改善を行い、授業時間の前後で学生が直接回答できる時間を設定して回収率が上がるように改善を図っていくことが求められる。

(5)結果および考察

人間文化学部全体の授業評価において、項目 D(総合評価)で「非常に満足している」と「満足している」と答えた学生は 94.8%になった。保育教育学科(全体)では 92.6%、地域文化学科(全体)では 96.0%の学生が学科授業に満足している。一方、保育教育学科の専門と全体、地域文化学科の専門と全体は、項目 D(総合評価)の値が他の区分と比べて低く、標準偏差からも回答にバラつきがある。「あまり満足していない」「満足していない」と答えた不満足層の要因を究明し、授業改善につなげていく必要があると思われる。

人間文化学部全体としては、B-3(知的好奇心を刺激し学習意欲を促す内容だった)、C-4(教員の説明は分かりやすかった)、C-5(シラバスの内容が実際に実施できていた)が、項目 D(総合評価)と強い相関があった。そのため、教員は学生の知的好奇心を高め、学びたくなるような授業の分野や授業内容を、シラバスに基づいて学生に分かりやすく実施・展開する必要があるといえる。学科別に見ると、保育教育学科は C-1(教員の熱意が感じられた)や C-3(学生の反応や理解度に注意を払いながら授業を進めた)と総合評価との相関が高い傾向が見られた。その理由としては、教職や保育職を目指している学生が、教師や保育者としての熱意や学生の実態に合わせた授業の進め方を授業担当教員にも求めており、その姿勢が総合評価と関連しているのではないかと考えられる。一方、地域文化学科は、項目 D(総合評価)で「非常に満足している」と「満足している」の合計が保育教育学科よりも高く、また B-3(知的好奇心を刺激し学習意欲を促す内容)も保育教育学科よりも高いことから、C-1(教員の熱意が感じられた)や C-3(学生の反応や理解度に注意を払いながら授業を進めた)などの教員の教授方法よりも、学びの分野や学修内容などのおもしろさや魅力、その他の理由で満足度を感じていると考えられる。

表1　アンケートの回収率（令和５～７年度）

	受講者数	回収数	回収率（%）	
令和７年度 秋学期	4337	1698	39.2	45.8
令和７年度 春学期	4577	2395	52.3	
令和６年度 秋学期	3978	1845	46.4	47.6
令和６年度 春学期	4779	2332	48.8	
令和５年度 秋学期	3938	2103	53.4	60.0
令和５年度 春学期	4538	3021	66.5	

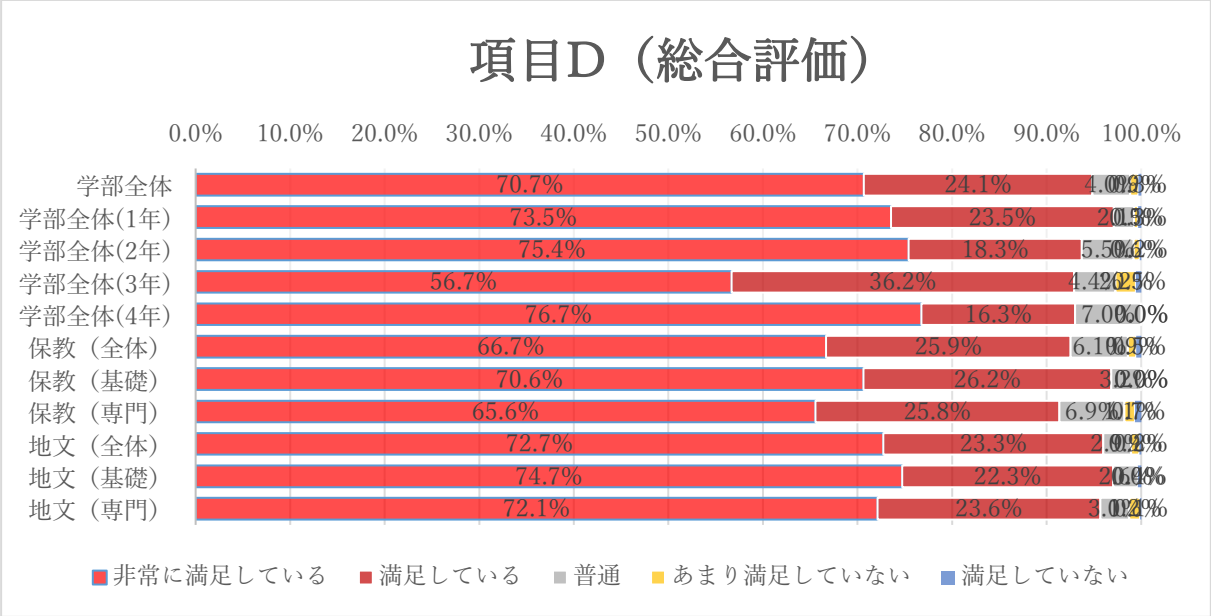
表2　各評価項目の平均点数

項目	A1	A2	A3	A4	A5	B1	B2	B3	C1	C2	C3	C4	C5	D
内容	学生自身の学習について					授業内容について			授業方法について					総合
	授業外学習（予習・復習など）に時間をかけた（週の平均時間で）	シラバスを読み、授業内容や授業の到達目標などを理解・把握した	授業の到達目標を意識しながら、授業に取り組んだ	自分の見識や興味を広げようと授業内外で努力した	最終的にシラバス等の授業の到達目標を達成できた	授業内容は、自分の水準に適していた	授業で教わる分量は適切であった	知的好奇心を刺激し、学習意欲を促す内容だった	準備が良くされていて教員の熱意が感じられた	対面授業における板書、OA・視聴覚機器、配布資料などを有効に活用していた	学生の反応や理解度に注意を払いながら授業を進めていた	説明はわかりやすかったか	シラバスに書かれた授業の目的・目標・授業内容が実際の授業で実施できていた	総合的に判断して、この授業に満足している
学部全体（平均）														
春学期	1.75	3.41	3.36	3.33	3.35	3.48	3.51	3.54	3.67	3.61	3.53	3.55	3.59	3.63
秋学期	1.83	3.43	3.38	3.39	3.40	3.50	3.56	3.58	3.69	3.65	3.56	3.59	3.60	3.64
学部全体（基礎科目）（平均）														
春学期	1.64	3.46	3.43	3.32	3.38	3.49	3.59	3.57	3.71	3.57	3.63	3.61	3.68	3.66
秋学期	1.56	3.43	3.38	3.35	3.41	3.51	3.58	3.57	3.74	3.73	3.67	3.67	3.66	3.70
学部全体（専門科目）（平均）														
春学期	1.79	3.39	3.34	3.33	3.33	3.48	3.48	3.53	3.65	3.62	3.50	3.53	3.55	3.61
秋学期	1.92	3.43	3.39	3.40	3.40	3.50	3.55	3.58	3.67	3.62	3.53	3.57	3.58	3.62
保教（全体）（平均）														
春学期	1.29	3.23	3.15	3.08	3.22	3.41	3.39	3.40	3.47	3.39	3.33	3.36	3.42	3.49
秋学期	1.48	3.26	3.20	3.19	3.32	3.43	3.49	3.44	3.57	3.50	3.44	3.49	3.50	3.57
保教（基礎）（平均）														
春学期	1.15	3.16	3.15	2.86	3.15	3.25	3.35	3.50	3.55	3.02	3.46	3.48	3.55	3.57
秋学期	1.20	3.18	3.16	3.09	3.25	3.33	3.51	3.42	3.66	3.60	3.60	3.59	3.58	3.67
保教（専門）（平均）														
春学期	1.32	3.24	3.16	3.14	3.24	3.45	3.40	3.37	3.45	3.49	3.29	3.33	3.39	3.47
秋学期	1.56	3.28	3.21	3.22	3.34	3.46	3.48	3.45	3.55	3.47	3.40	3.47	3.48	3.54
地文（全体）（平均）														
春学期	1.91	3.48	3.44	3.41	3.39	3.51	3.56	3.59	3.74	3.69	3.61	3.62	3.64	3.68
秋学期	2.01	3.52	3.48	3.50	3.44	3.53	3.59	3.64	3.75	3.72	3.62	3.64	3.65	3.67
地文（基礎）（平均）														

春学期	1.76	3.53	3.50	3.43	3.44	3.55	3.65	3.58	3.74	3.70	3.67	3.64	3.71	3.69
秋学期	1.72	3.55	3.48	3.48	3.48	3.59	3.62	3.64	3.77	3.79	3.70	3.71	3.70	3.71
地文（専門）（平均）														
春学期	1.98	3.45	3.41	3.40	3.37	3.49	3.52	3.59	3.73	3.68	3.58	3.61	3.61	3.67
秋学期	2.10	3.51	3.48	3.50	3.43	3.51	3.59	3.65	3.74	3.70	3.60	3.62	3.64	3.66

表3　各選択肢の番号と点数化について

選択肢	1	2	3	4	5
選択肢の基準	プラス評価	ややプラス評価	ふつう	ややマイナス評価	マイナス評価
点数	4	3	2	1	0



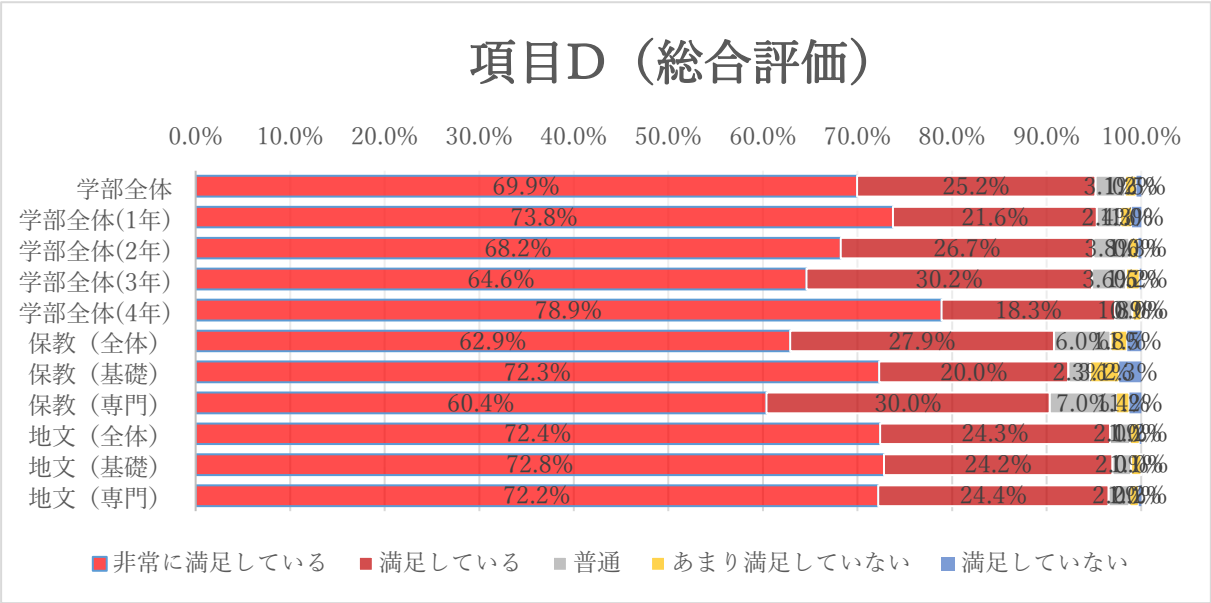
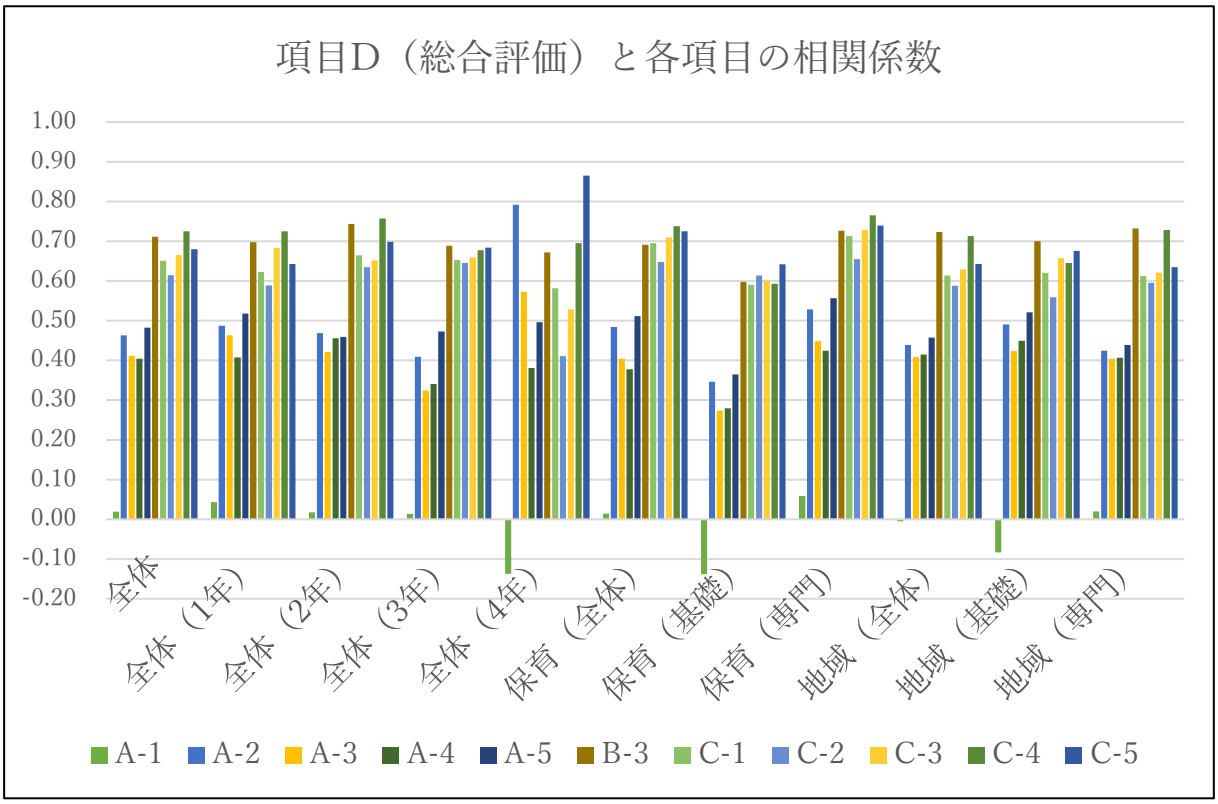


図1　項目 D（総合評価）の選択肢別割合（上図:秋学期、下図:春学期）



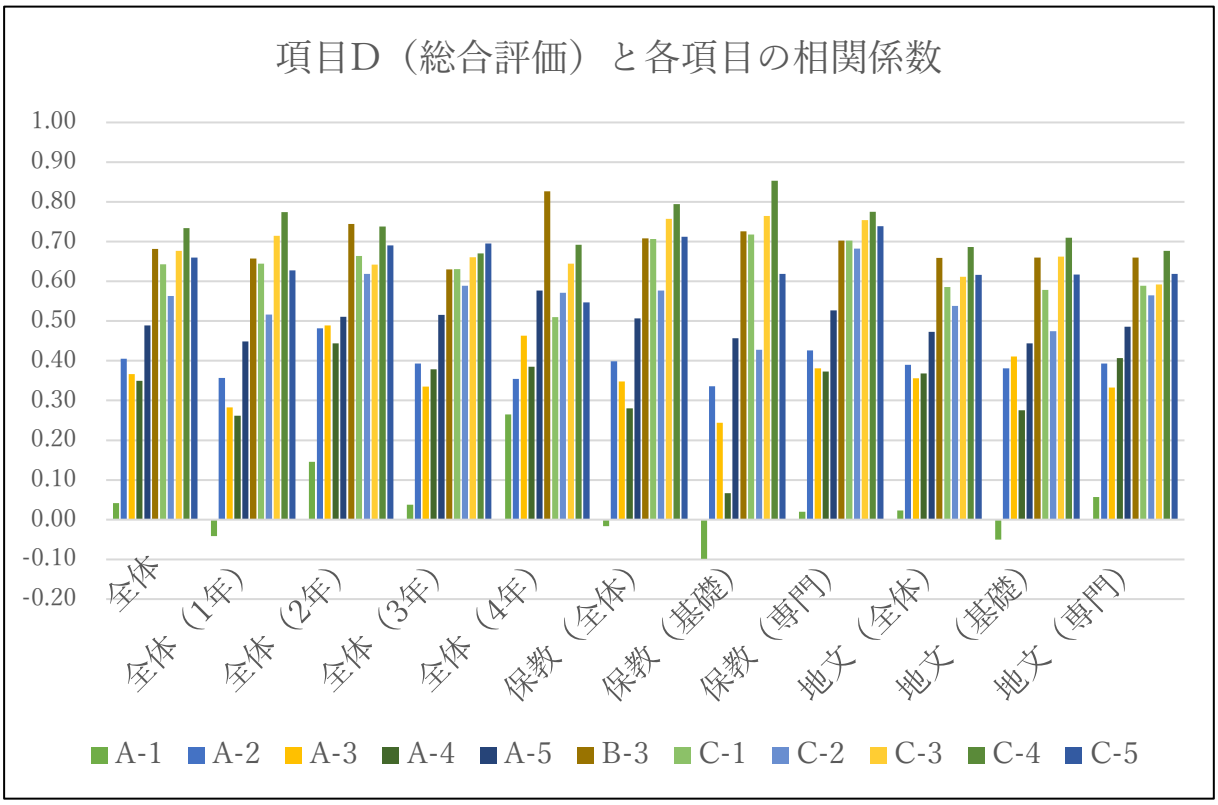


図2　項目 D(総合評価)と各項目の相関関係(上図:秋学期、下図:春学期)

2-(2)授業評価アンケートの実施報告(短期大学部)

(1)目　的:「学生自身の授業に取り組む姿勢」と「教員が行った授業」についてのアンケートを実施し、その結果を授業の工夫や改善に活用する。

(2)方　法:学生情報システム「Unipa-web」のアンケート機能を使用した。

(3)実施期間:(春学期)令和 7 年7月10 日(木)～8月 3 日(日)
(秋学期)令和 8 年1月23日(金)～2月16 日(月)

(4)回収率

短期大学部の授業評価アンケートの回収率は表１の通り、春学期45.1%、秋学期29. 7%であった。昨年度(春学期 62.5%、秋学期 44.4%)より大きく減少している。これは 2 年続きの傾向である。その理由として、特に秋学期に関しては、正月明けの最初の授業日に地震により2コマ目から休講、その後、大雪等の天候不順、それに関連しての交通機関の遅延、特に市営バスの全面運休の影響で、授業の休講、遠隔の授業に変更の時期が授業評価アンケートのアナウンス時期に重なったことが大きな要因として挙げられる。また春学期に関しては、災害等の影響は自体は無いので、学生の授業評価アンケートへの意識が非常に弱くなっていることと、教員のアナウンスの徹底が足りないことが関係していると思われる。

今後、回収率を高くするには、高くするには、例年指摘している、授業評価への回答の意義を直接担当教員が学生に周知徹底すること以外に、一部の私大が行っているように、アンケート実施日時を予め設定して、学内で教員が指導しながら入力させるのも一案だと思われる。また、今期のように災害等の影響で休講や補講が多い時期は、特に意識して教員や事務において、授業評価アンケート実施のアナウンスを増やすべきであろう。また、これまで以上に 8 回授業受講者への周知も徹底する必要があると思われる。

(5)結果および考察

ア 評価実施授業全体としての結果

各評価項目についての平均値は表2の通りとなった。平均値は、選択肢を表3のように数値化し、合計を有効データ数(データ数－無記入数)で割った数値である。また、項目 D(総合評価)に占める各選択肢の割合を集計したのが図1である。

短期大学部全体で授業に対して満足している割合(項目 D に占める「非常に満足している」と「満足している」の割合の合計)は、春学期は93. 6%、秋学期は 97.0%であった。学科別の評価(全体)では、春学期は保育学科 90.4%、文化情報学科96.2%、秋学期は保育学科97.3%、文化情報学科 96.8%であり、短期大学部全体、学科ごとのいずれも例年通り、特に秋学期は非常に高い数値を示している。

科目分類別に満足している割合を見ると、基礎科目は、春学期では保育学科 93.9%、文化情報学科 93.3%、秋学期では保育学科 87.0%、文化情報学科 97.2%であった。専門科目は、春学期では保育学科 89.7%、文化情報学科 98.3%、秋学期では保育学科 99.2%、文化情報学科 96.5%であった。

今年度の特徴として、昨年と同様に春学期秋学期を通して、特に専門科目が高い数値を示した。その理由として、回収率が低下した分、意欲のある学生の回答がデータに反映したこと、

保育学科のカリキュラム改正や、一昨年から続く、新学科としての文化情報学科への期待と意欲が学生にあることが考えられる。

イ 項目 D(総合評価)と他の評価項目との相関関係

項目 D(総合評価)と関わりが大きい評価項目を明らかにするため、各設問との相関係数を算出した(図2)。短大全体としては、春学期はB-3(知的好奇心を刺激し学習意欲を促す内容だった)、C-3(教員は学生の反応や理解度に注意を払いながら授業を進めていた)、C-4(説明は分かりやすかったか)で強い正の相関が見られた。保育、文化情報のカテゴリーの傾向は昨年度とは異なり、今年は対照的で、保育学科では学科全体と専門科目が相関が高いのに対して、文化情報学科は基礎科目の相関が高くなっていた。

秋学期は B-3(知的好奇心を刺激し学習意欲を促す内容だった)、C-4(説明は分かりやすかった)、C-5(シラバスで説明される授業の目的や達成目標等を達成できた)が、総合評価とやや強い正の相関が見られた。特にB-3 は、文化情報学科で高い正の相関が見られた。これに対して保育学科では、春学期に比べて相関の数値が低くなっている。この理由として、文化情報学科では、この時期、アクティブラーニング的な授業が増えたのに対し、保育学科では講義系や実習指導の授業が増えて、学生にとってはハード内容であったのが影響していると考えられる。また全体を通して、保育学科の数値が低く出ている。このことは学科内でも問題になっていて、特に1年生の欠席、遅刻の多さ、提出物等の遅延、学業に取り組む意識の低さ等々の要因が影響していると考えられる。一方、教員の指導方法や授業の取り組み、教材研究に関しても検討する必要がある。学生の学力低下は年々、教員も膚で感じていて、入学を許可したからには学生の学力保障について教員が責任を取るべきであろう。他の私立短大が実施しているリメディアル教育(補習教育)や個別指導、再履修制度も検討する時期がきているのかもしれない。改めて今後の検討が必要と考えられる。

表1 アンケートの回収率(令和5～7年度の回収率)

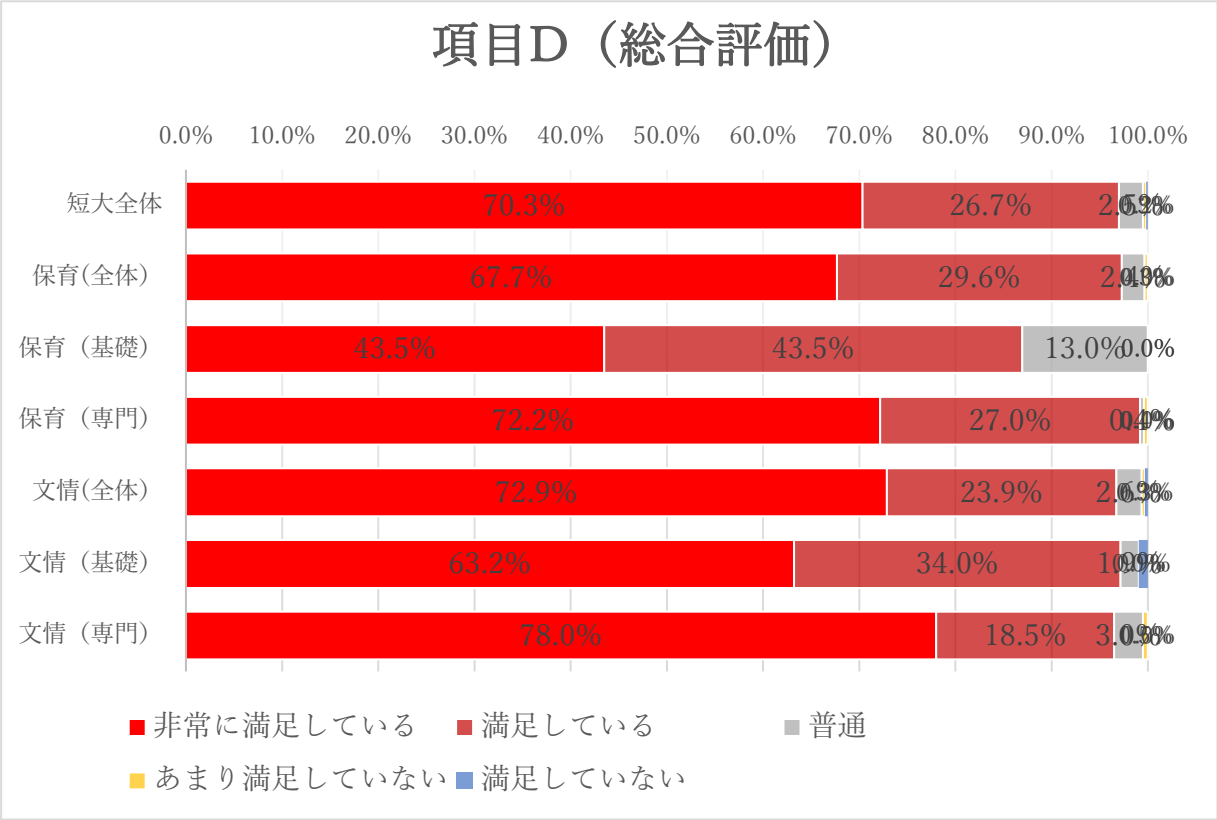
	受講者数	回収数	回収率(%)	
令和 7 年度 秋学期	2011	597	29.7	37.4
令和 7 年度 春学期	1987	897	45.1	
令和 6 年度 秋学期	1950	866	44.4	53.5
令和 6 年度 春学期	2000	1249	62.5	
令和 5 年度 秋学期	1795	1306	72.8	74.9
令和 5 年度 春学期	1918	1474	76.9	

表2　各評価項目の平均点数

項目	A1	A2	A3	A4	A5	B1	B2	B3	C1	C2	C3	C4	C5	D
内容	学生自身の学習について					授業内容について			授業方法について					総合
	授業外学習（など）に時間をかけた（週の平均時間で）	シラバスを読み、授業内容や授業の到達目標などを理解・把握した	授業の到達目標を意識しながら、授業に取り組んだ	自分の見識や興味を広げようと授業内外で努力した	最終的にシラバス等の授業の到達目標を達成できた	授業内容は、自分の水準に適していた	授業で教わる分量は適切であった	知的好奇心を刺激し、学習意欲を促す内容だった	準備が良くされていて教員の熱意が感じられた	対面授業における板書、OA・視聴覚機器、配布資料などを有効に活用していた	学生の反応や理解度に注意を払いながら授業を進めていた	説明は分かりやすかったか	シラバスに書かれた授業の目的・目標・授業内容が実際の授業で実施できていた	総合的に判断して、この授業に満足している
短大全体（平均）														
春学期	1.41	3.32	3.35	3.21	3.33	3.49	3.50	3.53	3.62	3.54	3.49	3.50	3.60	3.59
秋学期	1.56	3.38	3.30	3.21	3.35	3.50	3.61	3.52	3.67	3.61	3.57	3.58	3.60	3.67
短大全体（基礎科目）（平均）														
春学期	1.13	3.34	3.35	3.18	3.33	3.44	3.50	3.52	3.65	3.37	3.49	3.55	3.60	3.60
秋学期	1.22	3.32	3.13	3.07	3.11	3.30	3.47	3.26	3.60	3.51	3.29	3.44	3.47	3.50
短大全体（専門科目）（平均）														
春学期	1.52	3.31	3.35	3.23	3.33	3.51	3.53	3.61	3.61	3.49	3.48	3.48	3.60	3.58
秋学期	1.67	3.40	3.36	3.26	3.44	3.56	3.65	3.61	3.69	3.64	3.67	3.62	3.64	3.72
保育（全体）（平均）														
春学期	1.23	3.16	3.29	3.13	3.29	3.45	3.45	3.47	3.51	3.46	3.43	3.40	3.53	3.49
秋学期	1.39	3.28	3.22	3.13	3.37	3.48	3.54	3.46	3.62	3.56	3.53	3.51	3.57	3.65
保育（基礎）（平均）														
春学期	0.65	3.07	3.21	3.04	3.32	3.41	3.55	3.61	3.63	2.98	3.56	3.63	3.39	3.65
秋学期	0.96	3.00	2.74	2.72	2.89	3.09	3.24	2.80	3.22	3.35	2.85	3.13	3.15	3.30
保育（専門）（平均）														
春学期	1.34	3.18	3.30	3.14	3.28	3.45	3.43	3.44	3.49	3.55	3.41	3.35	3.52	3.46
秋学期	1.48	3.33	3.31	3.21	3.46	3.55	3.60	3.58	3.69	3.60	3.65	3.58	3.65	3.71
文化情報（全体）（平均）														
春学期	1.62	3.51	3.42	3.31	3.38	3.53	3.56	3.60	3.75	3.64	3.55	3.61	3.68	3.70
秋学期	1.71	3.48	3.38	3.29	3.33	3.52	3.67	3.58	3.71	3.65	3.62	3.64	3.62	3.69
文化情報（基礎）（平均）														
春学期	1.34	3.47	3.42	3.24	3.33	3.44	3.48	3.48	3.66	3.54	3.46	3.52	3.61	3.58
秋学期	1.33	3.45	3.30	3.23	3.20	3.40	3.57	3.45	3.76	3.58	3.48	3.58	3.60	3.58
文化情報（専門）（平均）														
春学期	1.83	3.54	3.42	3.37	3.41	3.60	3.63	3.69	3.82	3.71	3.63	3.69	3.73	3.78
秋学期	1.92	3.50	3.42	3.32	3.41	3.59	3.72	3.66	3.69	3.69	3.69	3.68	3.63	3.74

表3　各選択肢の番号と点数化について

選択肢	1	2	3	4	5
選択肢の基準	プラス評価	ややプラス評価	ふつう	ややマイナス評価	マイナス評価
点数	4	3	2	1	0



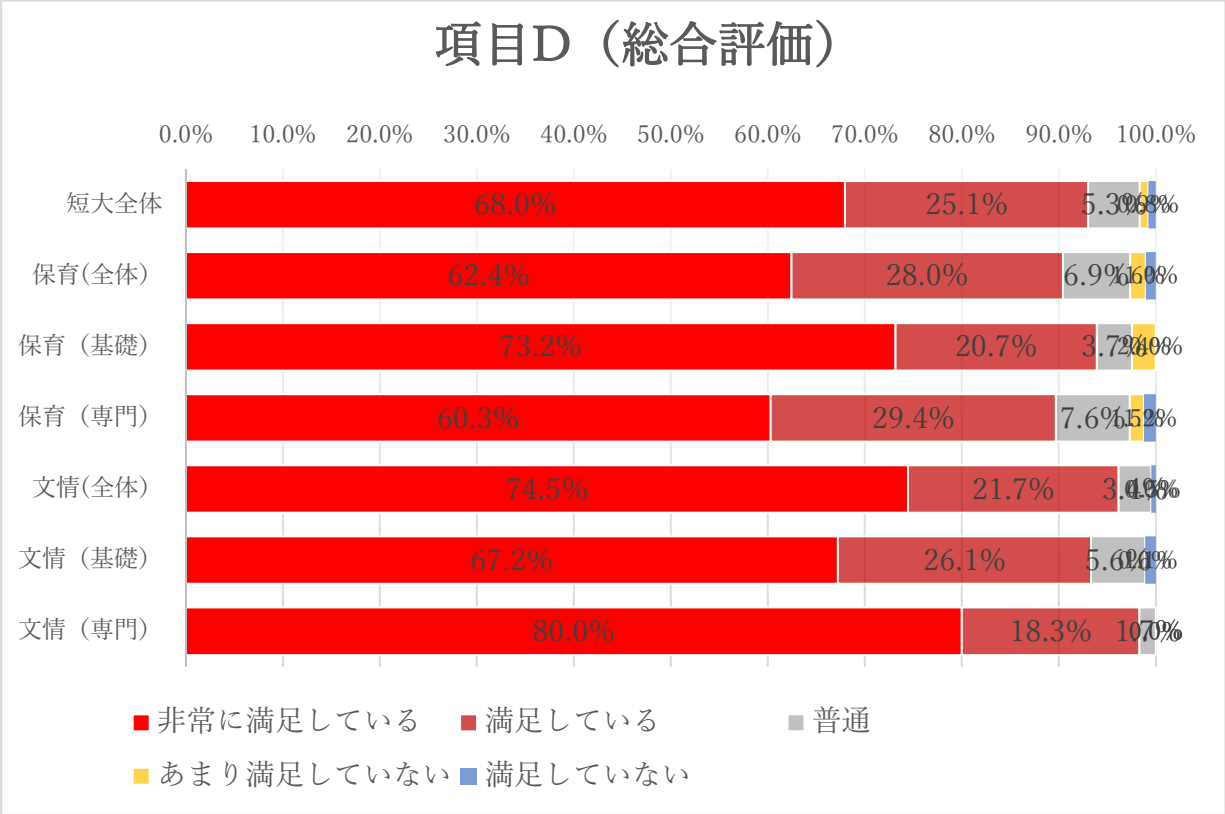
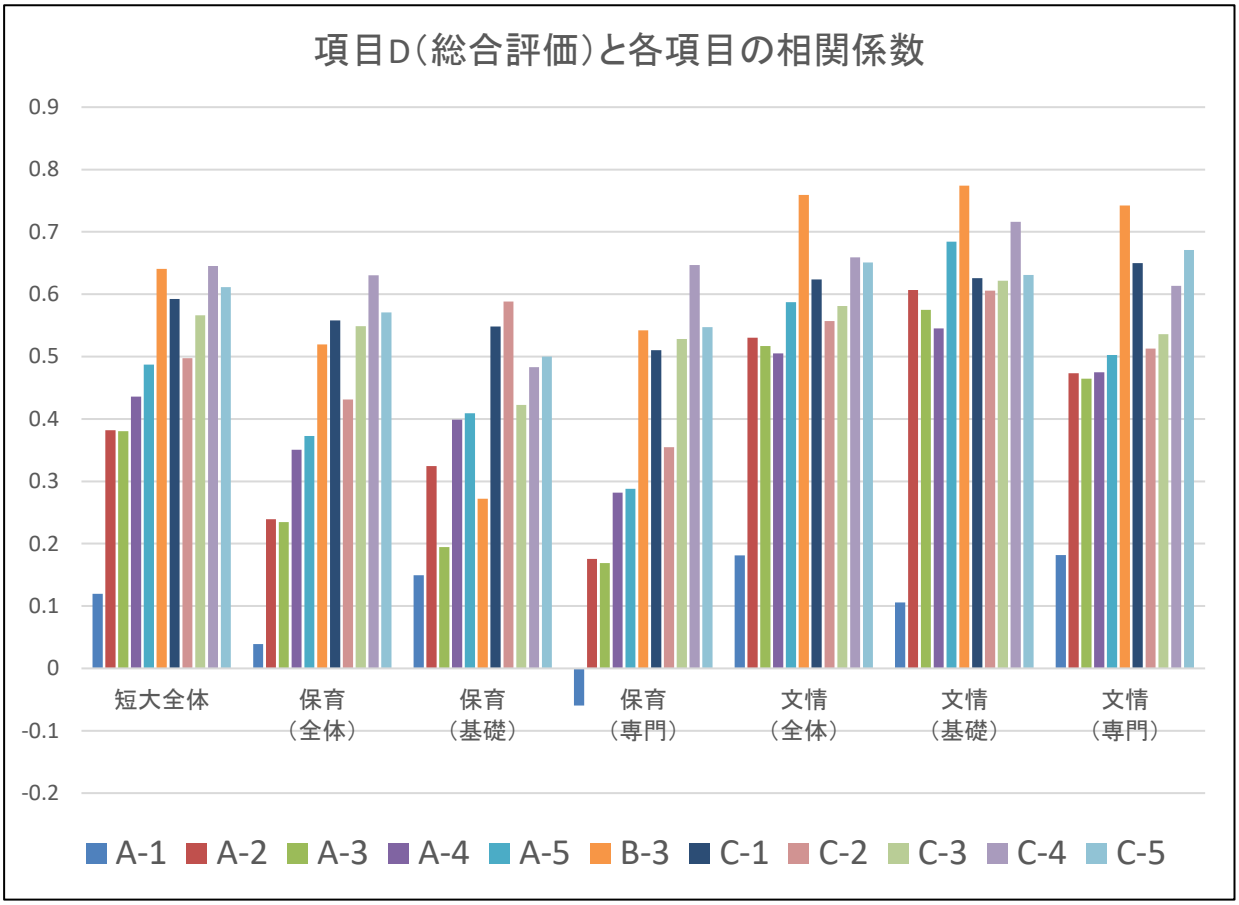


図１　項目 D(総合評価)の選択肢別割合(上図:秋学期、下図:春学期)



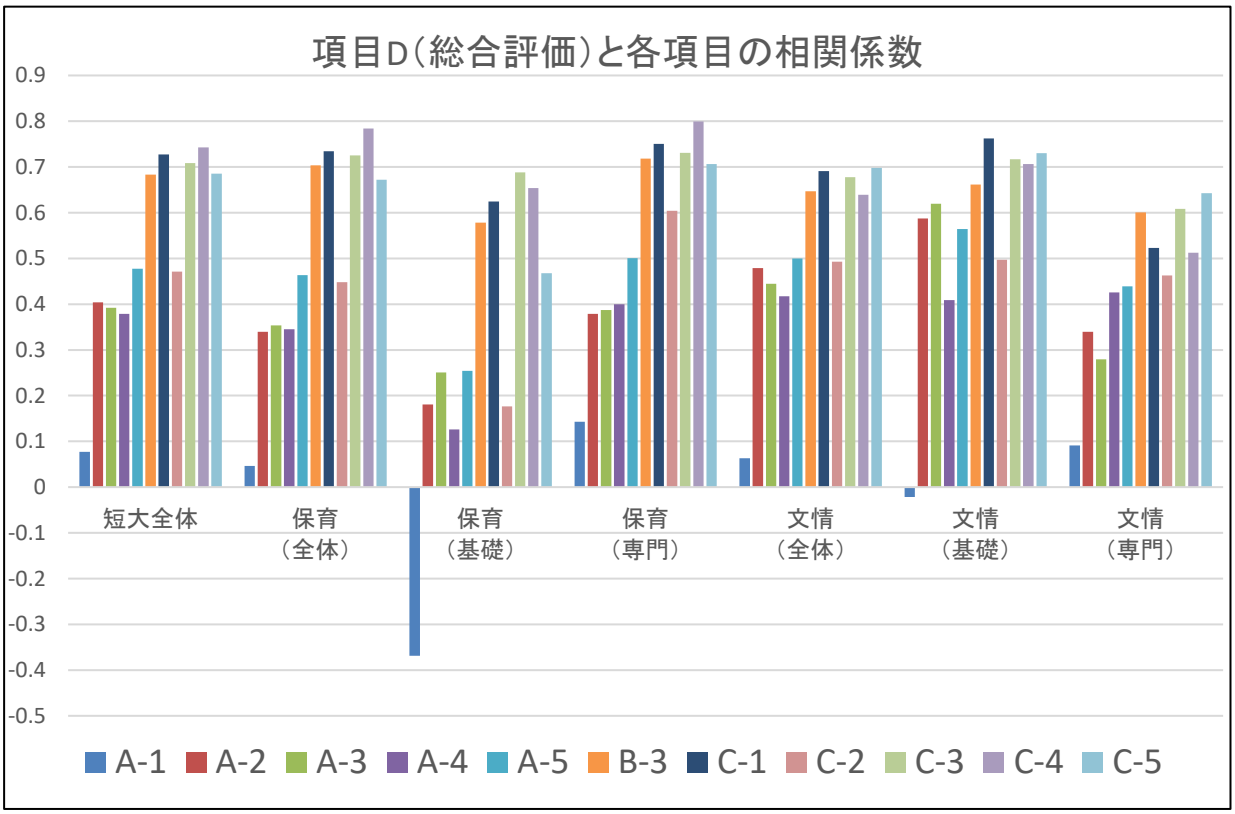


図2　項目 D（総合評価）と各項目の相関関係（上図：秋学期、下図：春学期）

3. 松江キャンパス独自の取り組み

(1)近隣県の大学の FD 活動の意見聴取(2025 年 12月)

令和 3 年度から FD 活動に関して学外の第三者の意見聴収を行ってきたが、本年度は島根県立大学の浜田キャンパスと出雲キャンパス、松江キャンパスの FD 委員長による FD 活動の意見交換を行った。令和 7(2025)年 12 月 10 日に、小山 FD 委員長、目次係長、青笹主任主事、島根県立大学浜田キャンパス FD 委員長の林秀司教授、坂田課長、島根県立大学出雲キャンパス FD 委員長の林健司准教授、河瀬係長と Teams により 3 キャンパスの FD 活動の状況や課題を報告した。成果としては、授業評価アンケート、教員フィードバックレポート、FD 研修会、授業公開・見学についての各キャンパスの取り組み状況と課題について情報共有するよい機会となった。

(2)授業評価アンケートについての分析と考察

松江キャンパスでは、学生が回答した授業評価アンケートの結果を専門業者によるデータ集計をもとに FD 委員会でアンケート調査概要および分析を作成し、全授業担当者に配布している。これにより、学科別の比較や教員が担当科目の結果について学科平均等と項目別に比較することができるなど、授業改善に役立つようにしている。

4. 松江キャンパス FD 委員会の今後の課題

(1)授業評価アンケートの実施と教員フィードバックレポートの回答率

①授業評価アンケート

授業評価アンケートの回答項目のうち、本学学生の授業外の自習などの自己学習時間の少なさが課題であると、自己点検・評価委員会の教務委員長や大学認証評価に関連する教職員から指摘されている。本学の授業では授業終了後に学生にコメント用紙に回答させたりミニレポートの提出なども課している教員もいるが、それらを自習と捉えていない学生もいるようである。そのため次年度の授業評価アンケートでは、授業評価アンケートの自己学習の質問事項に、授業以外で取り組んでいる授業に関する学修内容も含むことが分かるように文言や説明を工夫することを FD 委員会でも検討していく。

授業評価アンケートの学生の回答率については、令和 7 年度は回収率が 5 割を切ったが、松江キャンパスでここまで回収率が下がったのは初めてである。回収率向上のために、次年度はアンケート実施上の具体的な方法を FD 委員会で決定し、教員に周知・実施する必要がある。特に授業の最終回前後に学生が授業評価アンケートを回答する時間の設定を徹底すること、1単位8回の授業については、8回授業の前に授業評価アンケートを回答できるように教務システム上の改善を行い、授業時間の前後で学生が直接回答できる時間を設定して回収率が上がるように改善を図ることを次年度の FD 委員会で検討していく。

②教員フィードバックレポート回答率

令和 5 年度の春学期以降、教員フィードバックレポートの回答率が 100%になり、それ以降、令和 7 年度秋学期まで回答率 100%を維持している。教員のフィードバックレポートの提出は教育を提供する側の必須事項であるという認識が全専任教員に定着してきたが、今後もフィードバックレポートの提出率 100%を目指して、教員に働きかけていきたい。

（2）FD 研修会の研修内容・研修方法の検討について

FD 研修会は令和 6 年度より松江キャンパス会議後に実施する形に変更し、2 年目であった。1 年目に挙がっていた課題は、松江キャンパス会議と学科会議の間に FD 研修会を行うことによる会議等の長時間化や研修会の回数が多いことによる負担感の軽減であった。そのため、今年度は必要な研修会に厳選し、教員への負荷も考慮しつつも教育・研究活動がよりよいものになるための研修会となるよう、今年度は FD 研修会を計 6 回実施した。中期計画に掲げられている FD・SD 研修会の開催目標の年6回以上を念頭に置きながら、次年度も必要な研修会を実施していきたい。

（3）授業公開・見学と振り返りの FD 研修会について

新型コロナウイルス感染症により中断していた授業公開・見学を、令和 6 年度秋学期に再開した。学科内外を問わず教員同士で授業を見学できるように実施すること、授業見学者は見学後に授業見学記録を作成し、授業公開者とFD委員会に授業見学記録を提出することとした。その後、8 月の FD 研修会では授業公開・見学についての学科別の授業の振り返りの研修会を実施した。

今年度は授業公開（見学）期間を、春学期の令和 7 年 5 月 21 日から令和 7 年 7 月 25 日までの長期的な期間で実施した。実施率は 93.5%で、全専任教員 46 人中 43 人の教員が授業見学記録を提出した。8 月の振り返りの FD 研修会は教員 40 名が出席した。次年度以降も、授業での学生の学びの実態把握や教員の教育力の向上を図りつつ、大学内の組織的取り組みとしての FD 活動となるように継続し、授業見学後の授業の振り返り FD 研修会のテーマなどの検討・改善を図っていきたい。

【参考】

ＦＤ委員会　年間スケジュール

委員会の定期開催日程：第３水曜日

春学期		秋学期	
月	項目	月	項目
4	●前年度秋学期授業評価アンケートのフィードバック率の報告 ●今年度当初予算の確認 ●FD 委員内の業務分担(授業アンケート関係、学内研修関係、FD 活動報告書作成) ●授業見学の計画	10	● 授業担当教員へフィードバックレポートの回答依頼 ● 春学期授業評価アンケートのフィードバック率の報告
5	●学内 FD 研修会の計画 ●今年度春学期授業評価アンケートの実施日程の決定 ●	11	● 学内 FD 研修会の実施【年 1 回以上実施】
6	●学内 FD 研修会の研修案の決定（研修テーマ・実施日時）	12	●秋学期授業評価アンケートの日程案の決定 ●次年度 FD 計画・今年度業務実績報告
7	●春学期授業評価アンケートの学生回答	1	● 秋学期授業評価アンケートの学生回答
8	● 春学期授業評価アンケートの集計・とりまとめ（事務）	2	● 秋学期授業評価アンケートの集計・とりまとめ（事務） ● 秋学期授業評価アンケート報告書の作成（FD 委員）
9	●春学期授業評価アンケート報告書の作成（FD 委員） ●授業担当教員へ授業評価アンケートの結果を配布 ●授業担当教員へフィードバックレポートの回答依頼	3	● 授業担当教員へフィードバックレポートの回答依頼 ● 今年度 FD 委員会活動報告書の作成 ● 今年度 FD 予算の執行 ● キャンパス会議後研修の運用決定

※この他にも、キャンパス会議後の時間で他委員会等主催の研修会を FD 研修会との共催の形で実施